

なお、続刊予定は前述の他、本文篇として近世、近・現代各一巻、史料篇として同じく各一巻であり、都合全七巻を以て完結する予定ととき。本事業遂行の順調かつ速かならんことを祈りつつ、紹介の筆を擱くこととしたい。

(A5判 本文五六一頁 目次その他四四頁
昭和四九年八月発行 川西市役所 三、〇〇〇円)
(杉橋隆夫・京大助手)

三木與吉郎編

『阿波藍譜』史料篇

このほど『阿波藍譜・史料篇』上・中・下三巻が刊行された。本書は既に刊行されている「栽培製造篇」(昭和三五年)、「史話図説篇」(昭和三六年)、「精監事業篇」(昭和四六年)などととも『阿波藍譜』シリーズを構成し、主として近世の阿波藍に関する史料を収めたものである。しかし、書名こそ「阿波」を冠してあるものの、阿波以外でも多少とも藍に係ある史料は努めて収録されており、従ってその範囲は地

域的には北海道から沖縄まで、時代的には中世末から近代に及び、件数にして三六一件に達する膨大な史料集となっている。全三巻の内訳は、上巻に中世末から近世史料、中巻に近世史料、下巻に近代史料が充てられている。各史料は原則として編年で配列されているが、一つのまとまりをもった記録類については表紙記載年月日あるいは各事象・事件の初出の年月を以って基準とされている。従って一件の中には相当長文・長年月に亘るものも少なくない。

周知のように、本書の母胎たる徳島県板野郡松茂町中喜来の三木文庫には多数の阿波藍史料が蔵せられており、それらは従来から広く研究者の便に供せられてきたところである。本書はかかる三木文庫所蔵史料のみならず、全国各地の大学・図書館や個人所蔵史料、さらには藍に関する各種の稿本・刊本・研究論文等に至るまで遍く渉猟し、その成果を集大成したものと云えよう。本書が上梓されるまでに費やされた多大の年月と労を想う時、まさに感嘆に値するものがある。一例を阿波藍の江戸市場に關す

るものについて見ておこう。本書によれば、まず享保年間の関東売場株三六名制度の成立に至る事情を国立史料館所蔵「阿波国徴古雜抄統篇」や峰須賀文書が記し、その後享和以降の江戸市場に対する種々の統制強化や天保の株仲間解散、嘉永の再興に伴う動き等を土井富雄所蔵文書や凌雲文庫所蔵文書が追っている。また同文書や三木文庫・徳島県立図書館・遠藤林太郎所蔵文書、さらに「江戸買物独案内」などにより、当該時期の仲間規定のあり方や江戸藍店の所在、販路、価格等を検証することが可能である。この他にも、江戸―阿波間の藍玉相場に關する往復書翰、三木本店と江戸店支配人との出入一件史料ならびにこの結果たる江戸店式法(いずれも三木文庫所蔵文書)なども興味深いものである。

同様にして、徳島藩内においては云うまでもなく、大坂市場における阿波藍の流通機構とその変化等を追究することもできよう。さらに、本書には尾張・美濃・三河・安芸・信濃・畿内等々における種々の藍関係史料も豊富に盛られているから、それら

を適宜再整理、構成することにより、こと藍に関する限りは幕藩制下における市場構造を全国的視野において把えることが可能となるであろう。

中世文書については、量的には限られたものである。しかし、永正から天正期の長坂口紺灰問屋に関する文書群や天正から延宝に至る越前結城領紺屋職奈良屋文書、また阿波藍に関する史料としては年代的に最も古いものとされる天正年間の呉服家文書が収録されており、断片的ではあるがこれも貴重な史料ばかりである。

以上稚拙な紹介は、極めて多様かつ豊富な内容をもつ本書のごく一部分にすぎない。解説の中で編纂者も述べておられるように、本書の利用者がそれぞれの研究上の立場からこの膨大な史料群を批判・検討され、十二分に活用されることを切望するばかりである。

尚、最後に一言要望を述べさせて戴くならば、本書の目次が内容に比して余りにも簡略にすぎることが残念でならない。勿論、下巻末に付されている簡潔な史料解題は有

益なものである。しかし、なにぶん膨大なつ網羅的な史料集のことであり、また目次に示される一件の中には相当点数の史料が含まれ、長年月に亘るものも決して少なくないのであるから、各点についての年月日ならびに標題・所蔵者名・出典等が一覧できるとすれば、多様な研究テーマに即しての関連史料の検索と諸事実の再構成とにさらに便なるものがあつたと思われるのである。さらに願わくば、史料典拠について、とりわけ個人所蔵者についてはその所在地をも記しておいて頂きたかつたものである。

勝手な言辭を連ねたが、それはいざれにせよ、本書の、藍研究に逸することのできない史料集としての価値をいささかでも損うものではない。末尾ながら、本史料集刊行事業の継続がより一層豊かに結実することを心より期待するものである。

(A5判) 上巻六九三頁 中巻五二三頁 下巻六七三頁 一九七四年二月 三木産業株式会社発行 頒価九〇、〇〇〇円
(袖田善雄・京都大学大学院生)

会 告

五月二十二日、楽友会館において史学研究会理事会・評議員会を開催し、昭和五十年年度予算案のほか、左記の役員改選を決定いたしました。

常務理事(会計担当) 樋口隆康

(編集担当) 朝尾直弘

(庶務担当) 松尾尊兌(留任)

なお、新しく理事に本田実信氏を選任
旧常務理事の水津一朗氏は理事に、笠沙
雅章氏は評議員に、それぞれ復帰されま
した。

本会ほか五十四学会は、去る五月一日付で、郵便料の値上げ案に対する左記のようなすえおきの要望書を、関係各機関に提出いたしました。

郵便料すえおきの要望書

昨年末、郵便料の値上げ案が公表され、それによれば第三種五〇グラムまで現行一二円のところを三五円に、第四種一〇〇グラムまで現行一五円のところを二〇円にするとのことでした。

もし、この通りの値上げになれば、各学